全カリ Newsletter No. 57
2024.3.29
立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

言語新カリキュラムの始動

全学共通カリキュラム運営センター言語系科目構想・運営チームリーダー／
外国語教育研究センター准教授　松本 旬子

全学共通カリキュラムの言語教育を、加速する国際化に即するよう改革し、2016年度に開始した「RIKKYO Learning Style」に組み込んで行く。それを目指して準備が進められてきた全学共通科目言語系科目では、2024年度新しいカリキュラムがいよいよスタートする。言語A・B新カリキュラムの根幹にあるCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）に基づいた「複言語・複文化主義」の考え方とはいかなるものか。

日本国内では、高校までは母語である日本語と英語（言語A）しか勉強していない人が多いが、それ以外の言語（言語B）を新たに学ぶことで自分の可能性を大きく広げることができる。複言語を学び、さまざまな言語圏の人との交流が図りやすくなれば、その人たちの思考に触れることができる。自分の常識を疑い、自分なりに考えて判断する力も身につく。既習の英語はもちろん、相対的に日本語を分析する機会となり、日本語能力の向上にも及ぶ。また、言語はその国・地域の文化的背景と密接に関わっているため、これまでは未知であった文化に触れる機会にもなる。そして、言語の学びを続けていると、その言語圏の歴史的背景が理解できる瞬間が訪れる。このように、「複言語・複文化主義」は、自分の中にさまざまな能力を築いていけるという大きな利点を持つ。「複言語・複文化主義」の視座を養うことは、他者に寛容になること、他者を理解すること、ひいては世界平和につながっていくのである。

多くの学生にとって小学校から学び続けてきた言語である英語は、大学においては、ある程度の能力を備えている前提でその能力を伸ばし、使えるようになることを目標としている。言語A新カリキュラムの大きな特徴は、必修科目に「英語ディベート」、自由科目に「CLIL科目」*を導入したことである。必修科目ではアウトプットを重視した科目が展開され、自由科目ではより一層「英語で学ぶ」段階に入っていく。これらを経ることで、各学部が展開するEMI科目へとつながっていき、４年間を通じた継続的な学修が実現可能になる。

言語Bは多くの学生にとって初習だが、語彙や文法の学習に偏重せず、英語同様、運用能力を備えることを目指す。言語B新カリキュラムでは、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、朝鮮語、ロシア語の６言語で共通のカリキュラムを展開し、「RIKKYO Learning Style」の「導入期」「形成期」「完成期」各段階に適した科目を配置して、学習者の様々な目的や方法に即した継続学修の場を提供する。加えて、「複言語・複文化主義」の価値を知り知見を深める科目を開講する他、個人の複言語・複文化の能力を豊かに発展させるために学べる言語も増やす。

立教大学は「専門性に立つ教養人」の育成を教育理念として掲げているが、教養には豊かさ・幅広さが重要である。教養の代表格とも言える言語についても考え方は同じだ。全学共通科目言語系科目において、言語Aに加え言語Bを必修とし、すべての学生に等しく２言語学習の場を提供し続けていることそのものが、「複言語・複文化主義」に重きを置いていることのあらわれであり、本学の教育理念を具現しているとも言えるだろう。

＊「CLIL」についてはP.3を参照

新しい英語教育カリキュラムの理念ー変容的教育・CEFR・CLIL

全学共通カリキュラム運営センター英語教育研究室／
外国語教育研究センター教授　新多 了

本学創立150周年を迎える2024年４月、新しい英語カリキュラムがスタートする。このカリキュラムでは、初年次必修英語科目から、各学部専門分野の講義を英語で学ぶ力を育てる仕組みづくりを目指している。本稿では、これまでの経過を振り返りながら、新しい英語カリキュラムの理念と狙いについて紹介する。

新しく開設された外国語教育研究センターの運営が軌道に乗り始め、コロナ禍とともに始まったオンライン授業への対応も落ち着いた2020年秋、英語教育カリキュラム改訂の準備に取り掛かった。最初に考えたことは、150年の歴史を持つ「英語の立教」にふさわしい教育理念を土台としたカリキュラムである。目指すのは、日常会話のような表層的な英語力ではない。学生が生涯にわたって力強く成長を続ける基盤となる深く考える力を、英語教育を通して身につけるカリキュラムを作ることを目標とした。図１が示すように、新しい英語カリキュラムは「CLIL」を基盤とし、CLILは「CEFR」を、さらにCEFRは「変容的教育」を土台とする。

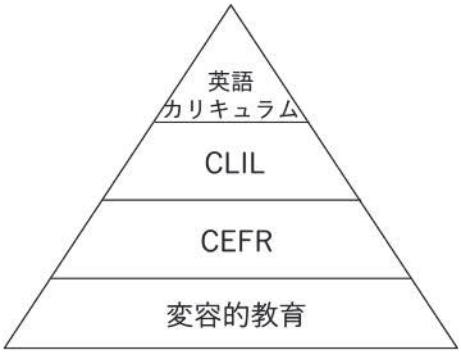


図１．英語カリキュラムの理念的枠組み

変容的教育

かつて主流であった知識・スキル伝達を中心とした「伝統的教育」（traditional pedagogy）に対して、21世紀は「変容的教育」（transformative pedagogy）の時代と呼ばれる。「変容」の対象は、「自己」と「社会」だ。「自己変容（変革）」とは、自分のアイデンティティを構築することを意味する。変化の激しい現代のグローバル社会では、次々に新しいツールや考えが登場する。このような時代には、「主体的に学ぶ力」、つまり、自ら課題を設定し、行動（解決）し、振り返り、次のアクションにつなげていく力が求められる。この学びのサイクルを何度もくり返すことで、どのような環境にも適応し成長を続ける「生き抜く力」を身につけることができる。もう一つの「社会変容（変革）」には、地域社会や国内外の様々な問題に関心を持ち、自分の生きる世界をより良い場所へ変えていこうとする姿勢が求められる。社会には常に数多くの問題が存在するが、それらを地道に解決することで、私たちの住む世界をより良い場所に変えていくことができる。そのような態度を育てることも変容的教育の目的である。

CEFR

変容的教育の理念はCEFR（Common European Framework of Reference for Languages：ヨーロッパ言語共通参照枠）に反映されている。CEFRと言えば複言語主義が有名だが、もう一つ重要な理念に「活動志向アプローチ」（action-oriented approach）がある。CEFRは、言語使用者・学習者をsocial agent（社会的に行動する者）と捉える。つまり、まず社会の中に存在する課題を特定し、それを解決するために言語を使用する。したがって、将来の役に立つからとりあえず英語を学んでおこうという従来の考え方とは出発点が異なる。このような、課題達成を重視する姿勢を、活動志向アプローチと呼ぶ。現実の課題を達成するには単なる情報伝達では不十分で、多くの場面で他者との協働が求められる。例えば、CEFRの言語使用モードの一つであるinteraction（やりとり、相互交流）は、reception（listening, reading）とproduction（speaking, writing）の単純な足し算ではない。interactionとは情報の受信・発信にとどまらず、新しい意味を他者と協働的に構築する創造的な活動なのだ。

CLIL

上述の通り、伝統的な英語教育では英語の知識・スキルの習得を重視する。外国語を使うために、語彙や文法を理解し、流暢に使えるようにたくさん練習することは大切である。しかし、グローバル社会の現場では、その知識やスキルを使って「何ができるか」が問われる。「英語を使って何ができるか？」に応えるために、新しいカリキュラムでは、CLIL（Content and Language Integrated Learning）を採用している。

CLILは、Content（内容）とLanguage（言語）の有機的統合を目指す言語教育アプローチである。伝統的な英語教育では、まず言語能力の育成に特化する。もちろん、あらゆる言語学習には何らかの内容が伴うが、伝統的教育では内容は二次的な要素で言語を習得するための手段と捉えられてきた。一方、CLILの目的は言語と内容を同時に学ぶことである。したがって、それぞれをバラバラに（あるいは順番に）学ぶのではなく、両者を有機的に統合している点に大きな特徴がある。

「内容」（Content）と「言語」（Communication）に加えて、CLILではさらに２つのCが明示的に示されている。高度な言語能力を身につけるには、高度な思考力（Cognition）が求められる。認知は、記憶、理解、適用などの「下位思考スキル」(Lower-Order Thinking Skills: LOTS)と、分析、評価、創造などの「上位思考スキル」（Higher-Order Thinking Skills: HOTS）に分類される（図２）。CLILの授業ではLOTSからHOTSが組み込まれた課題に段階的に取り組むことで、学生が思考力を高められるように工夫されている。

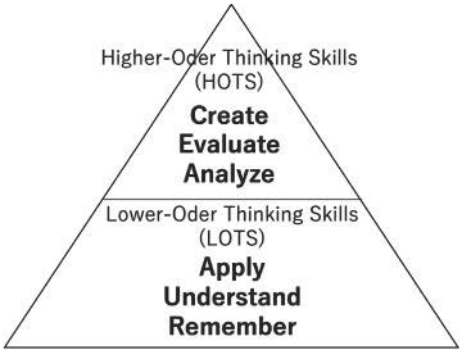


図 2. Bloom's Revised Taxonomy

４つ目のCであるCultureは、単なる外国文化理解だけではなく、もっと広い意味でとらえる必要がある。異なる国・地域はもちろん、自分とは異なる他者を深く理解し、共通の課題を解決するために協働する力の修得である。つまり、Cultureは変容的教育の「自己・社会を変革する力」と密接に結びつくのだ。

グローバル・コミュニケーション／グローバル・スタディーズ／グローバル・キャリア

新しくスタートする英語自由科目では、「グローバル３領域」を設定している。「グローバル・コミュニケーション領域」は、必修科目で身につけた英語力を土台として、英語による発展的な内容の授業を受講するための多様な準備的授業を提供する。「グローバル・スタディーズ領域」は、英語で専門的内容を学ぶ力を身につける領域である。経済、エコロジー、ツーリズム、SDGsなど、現代社会の重要なテーマについて英語を使って学ぶ科目を展開する。「グローバル・キャリア領域」では、卒業後グローバル社会で活躍するために必要な英語力の育成を目指す科目を提供する。

大学の学びは外の世界とつながって初めて意味を持つ。したがって、新しい英語自由科目は外のさまざまな授業・活動と緩やかにつながることを意識している。具体的には、学生たちが授業で学んだ力を使って、留学、学部EMI、企業のインターンシップ、地域社会のボランティアなどさまざまな活動に参加し、そうした教室外での経験を授業に持ち帰ってくれることを期待している。こうしたさまざまなネットワークが広がり、異なる経験を持った学生が対話・協働を重ねることは、深く考える力の育成に寄与すると考えている。

本稿で説明した、変容的教育観、複言語主義、CLILは異なる概念だが、根本的な考えは共通している。つまり、複雑でダイナミックに変化するグローバル社会で生き抜くために、学生たちが自らのアイデンティティを作り、社会をより良い姿に変えていく力を身につける教育である。新しい英語教育カリキュラムが本学の伝統をさらに発展させ、多くの学生が社会で活躍する力を身につける土台となることを期待している。

言語B新カリキュラム概要

全学共通カリキュラム運営センターフランス語教育研究室主任／
外国語教育研究センター教授　関 未玲

CEFR「共通参照レベル」の導入

言語Bとして開講しているドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、朝鮮語、ロシア語の６言語においても２０２４年度に新カリキュラムを開始し、これまでの言語教育をさらに発展させた形で新しい「学び」の場を提供します。言語B新カリキュラムの柱となるのは、英語同様、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）です。１９８９年に始まった欧州評議会による「ヨーロッパ市民のための言語学習」プロジェクトに端を発して作成されたCEFRは、ヨーロッパで使用されている様々な言語に適用可能な学習の評価や指導を示した統一ガイドラインで、共通参照レベルがＡ１/Ａ２/Ｂ１/Ｂ２/Ｃ１/Ｃ２として表されています。以降、共通参照レベルは日本の英語教育でも用いられるようになり、外国語の運用能力をはかる基準として徐々に浸透しつつあります。新カリキュラムでは６言語の統一指標としてCEFRに基づくレベル設定を目安として取り入れることで、教育方法やその目的、さらに評価について、各言語の特性に配慮しながらも言語の垣根を超えた教育を展開していくことになります。共通参照レベルの導入により、学生は自らの言語運用能力がどのレベルにあるのか客観的に知ることもできます。

必修科目の新たな試み

CEFRでは、実践的な言語運用能力が問われます。文法や語彙といった言語に関する知識に加え、習得した言葉を使い､社会活動のなかでTPOに合わせた適切なコミュニケーションをはかることが求められます。新カリキュラムの必修科目では、学習した言語を運用し、コミュニケーション能力を高めるような機会を増やすべく、２０名程度のクラス設定でアウトプットのスキルを磨く授業を展開していきます。言語Bでは、必修科目として週に２コマが設定されていますが、そのうちの１コマがアウトプット中心の授業となります。もう一方は４０名程度のクラス設定で、文法を中心にリスニング等のスキルも磨きながら、インプット中心の授業を行います。言葉の仕組みを理解するうえで、文法的知識も欠かすことはできません。アウトプットとインプット双方の側面から言語修得を試みることで言葉を、その言語が話される背景ごと学べるような機会を提供していきます。言語B必修科目において、２０名という少人数でアウトプットの能力を高める実践的な授業を展開するのは、立教が言語教育に力を入れている何よりの証です。

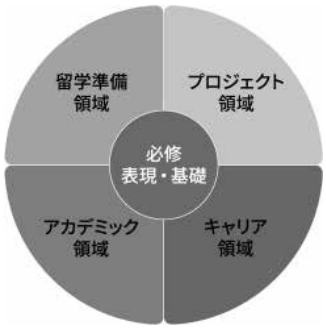
CEFRに基づいた新カリキュラムを導入する背景として、２０２０年度より初等・中等教育において段階的に実施されている新学習指導要領の存在があります。新学習指導要領では外国語（英語）教育の必要性が説かれており、アクティブ・ラーニングとコミュニケーション能力の育成に比重を置いたカリキュラムがスタートしています。さらに日本国内でも日常的に非日本語母語話者と話す機会が増え、複数の言語や文化を知ることが不可避となっています。自由科目においては、必修科目で培った言語運用能力をさらに高めると同時に、その言語が話される地域や国について文化的な理解を深める授業も開講されます。日本文化または英語圏の文化とは異なる国々の考え方、思考方法、コミュニケーションの取り方について学び、さまざまな価値観を通して視点を相対化させ、視野を広げることは、言語教育における重要な学びの一つでもあります。

自由科目の4領域

必修科目とともに自由科目もリニューアルします。自由科目では４つの領域を設定し、それぞれの目的に即した授業を開講していきます。旧カリキュラムでは、レベル別に中級科目と上級科目という設定区分を用いてきましたが、新カリキュラムでは複言語・複文化への理解も言語の学びに欠かせないことから、学習の目的に基づい

て領域を設定しました。価値観が多様化する現代において、学生の目的意識も、言語の学習に求めるプライオリティも大きく変化しています。このような変化に対応すべく、自由科目の領域を「留学準備領域」、「プロジェクト領域」、「キャリア領域」、「アカデミック領域」に区分し、目的別の科目群を設定することとしました。履修制度が複雑化する傾向にあるなか、どの科目を履修するべきか迷う学生のロスタイムも解消したいという意図がありました。各領域の特徴は以下のとおりです。

「留学準備領域」は留学に求められる言語運用能力の修得と、当該地域の文化への理解を深めることを目指す総合的な科目領域です。今後さまざまな国や地域へ留学する学生が増えていくことを見据えて、協定校への留学に際して求められるB1レベルの言語運用能力と現地で不可欠な素養を身につけることを目指します。また旧カリキュラムで実施していた「海外言語文化研修」を継続し、短期の留学プログラムを展開します。このプログラムを通じて多くの立教生が留学先で貴重な異文化体験を積んできました。参加者のニーズを取り入れ、長きに渡り改良を重ね実施されてきた本プログラムは、留学準備領域の集大成ともいえる科目となっています。



言語B自由科目の４領域

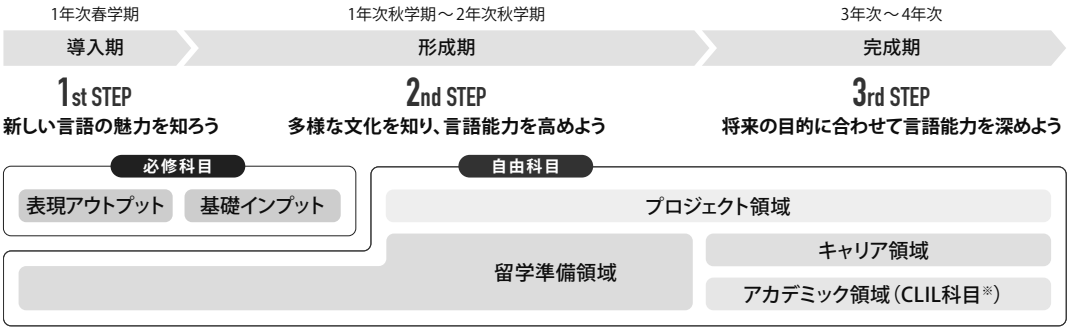
「プロジェクト領域」は言語運用能力の緩やかな向上と、言語学習を通して文化的教養を培うことを目指す科目領域です。履修者が自らの興味や関心に沿って多様な言語と文化に触れて異文化理解へと至るような科目群を展開していきます。言葉を学ぶとともに、その言語が話される文化的・歴史的・社会的背景について知識を深める科目が設置されています。「プロジェクト領域」では６言語以外にもポルトガル語や日本手話、2024年度から新しく加わるインドネシア語、タイ語、タガログ語、ベトナム語も学習することができます。

「キャリア領域」は、グローバル社会で大いに活躍するために必要な言語運用能力の育成を目指す科目領域です。当該言語を用いる仕事に就くためには、高い語学力が求められます。キャリアで活かせるハイレベルな言語運用能力の修得を目指す学生を対象に、多様な文化背景を持つ相手と交渉する力を養い、ビジネス資料の作成やプレゼンの論理構築も学べるような科目を提供します。加えて、難易度の高い上級レベルの検定試験対策科目も開講します。さらに通訳・翻訳の基礎を学ぶ科目など、学生が自身の将来像をはっきりと意識しながら実践的な学びを得られるような授業を開講していきます。

「アカデミック領域」は「言語を学ぶ」ことから「言語で学ぶ」を目標に据えた、自由科目のなかでもっとも高度な科目内容を展開する領域です。留学経験者や国内外の大学院進学を考えている学生を対象に、研究活動で必要となるスキルや言語運用能力を培います。文献のリサーチや講読、論文執筆、プレゼンなど専門的な学びを実践的に学んでいく科目群を設置します。またCLIL科目も設置し、人文・社会・自然科学系のテーマや、グローバル社会で理解が求められるトピック等を中心に扱う授業も開講します。当該言語を使って専門領域を学べるような言語運用能力を身につけることで、全カリ総合系科目F科目（言語B）の履修へと接続していきたいとも考えています。

各言語の特性に配慮しながら、言語の垣根を超えてチーム一丸となって新カリキュラムの整備をしてまいりました。多くの学生が立教から世界へと活躍の場を広げてくれるよう長きにわたり熱い議論を交わしてきましたが、新カリキュラムの開始にあたり、多くの力に支えられてきたことを感謝とともに最後に付したいと思います。

言語B新カリキュラムの全体像



※CLIL科目：Content and Language Integrated Learningの略。学部の専門科目を英語で学ぶための土台をつくる科目。

全学共通科目 総合系科目（F科目）「Japanese Arts A」・英語自由科目「CLIL Seminars：Japanology」を見学して

全学共通カリキュラム運営センター英語教育研究室／
外国語教育研究センター准教授　シュロスブリー 美樹

今回は異なる科目群から、同じ先生による同じトピックの二つの授業を見学させていただきました。Herb Fondevilla先生（外国語教育研究センター特任准教授）による総合系科目（F科目）「Japanese Arts A」と言語系英語自由科目「CLIL Seminars: Japanology」です。前者は英語で行われるオンデマンド講義であり、後者はCLIL（Content and Language Integrated Learning）を導入した対面英語クラスでした。トピックはどちらも1960年代以降の日本のファッションとサブカルチャーに焦点を当てていました。理解しやすい英語で解説され、過去に流行ったファッションやメイクも理解できるように、豊富な視覚資料が使用されていました。そのため、当時のファッションや文化についての知識を全く持たない学生でも十分に理解できたと思います。

「CLIL Seminars: Japanology」の授業風景

二つの授業の違いの一つは授業形態です。オンデマンド講義と対面授業を比べるとそれぞれに利点があります。オンデマンド講義は好きな時間に受講でき、またわからないところは何度も見ることができるので、深い理解が得られるという利点があります。その一方で対面授業の方が、感情が動くのでより授業の内容に興味がわくと思いました。例えば奇抜なガングロのファッション（1990年代の日本のコギャル文化から生まれたファッション）　の写真を見ながら先生の説明を受ける時、学生は驚いた表情をします。するとその顔を見て先生は、「本当にこういうファッションがあった時代だったんだよ」ということを伝えたくて小話も飛び出しますし、声のトーンまで少し変わります。すると学生は余計に面白くなって笑いだし、周りの学生とその感情を共有するというわけです。こうしたことから、対面授業の方が話の面白さが学生によりダイレクトに伝わり、心のより深いところまで授業の内容に興味がわくのではないかと思いました。

二つの授業のもう一つの違いは、F科目とCLIL科目の違いです。F科目は英語による講義ですが、CLIL科目の方は言語と内容が統合されていますので、言語に焦点を当てたアクティビティが行われます。今回の場合、CLIL科目ではファッション史における単語や表現を学びながら先生の質問に答え、その単語や表現を使ってグループでディスカッションを行い、最後はクラスで発表するという風にアウトプットのアクティビティが段階的に組み込まれていました。それによって、学生たちの言語スキルは、英語で理解するというレベルから、英語で語ることができるというレベルに近づいていったと思います。F科目の方が同じ時間内により多くの知識を身につけることができると感じましたが、CLIL科目では理解した内容をある程度は英語で他者に伝えることができるようになるのではないかと思われました。

今回は授業形態と科目という二つの要因があって、残念ながらF科目とCLIL科目を純粋に比較対照することはできませんでした。しかし、より多くの知識を得て深く理解するにはF科目の方が適していて、トピックに興味を持ち発信するところにまでつなげるにはCLIL科目の方が適しているのではないかという印象を受けました。F科目、CLIL科目ともに、双方の利点がさらに活かされるカリキュラム開発の必要性を感じました。

副部長としての４年間を振り返って

全学共通カリキュラム運営センター副部長／経済学部准教授
飯島 寛之

全学共通カリキュラム運営センター（以下「全カリ」）前部長 井川充雄先生、現部長 浅妻章如先生をはじめとするコア会議メンバーや全学共通教育事務室の皆さん、教務事務センター全カリ担当の皆さんなど多くの方に助けられつつ、2020年４月から４年間務めてきた全カリ副部長の任を終えることになりました。

折しも私の任期の終了と時を同じくしてグローバル教養副専攻の海外体験にかかる特別措置が終了するように、この４年間はコロナ禍のはじまりと「終わり」にちょうど重なる期間でした。在外研究から帰国して引継ぎを行った2020年３月後半には考えられなかった速度で感染状況の悪化が一気に進み、任期の半分以上は未知の事態のもとでの授業運営・実施に関するさまざまな検討に追われるなど、「全カリの前進」に尽力されたこれまでの副部長とは違う役割を担ったものと思います。それまで私は全カリとの接点がまったくなく、従来どうだったかをほとんど知らずにその決定プロセスにかかわることになったのですが、部長や言語・総合のチームリーダーとの議論は、緊急事態下にあっても全カリは何を堅持し、学生に何を提供し続けるべきかという全カリの軸を学ぶ貴重な機会となりました。

また、全学的な役職につくと他学部の先生方と協働する機会に恵まれますが、在職中は、外国語教育研究センター（FLER）、とくに新カリキュラム策定にかかるワーキンググループにおいて言語Bの先生方に大変お世話になりました。FLERの設置とともに着任されたばかりの先生方にとって、通常の授業や業務に加えての新カリ策定は大変な作業であったに違いありません。言語教育について右も左もわからない私が座長だったのだからなおさらだと思います。2024年度からついに動き出す新カリも、語学の教授方法の向上や社会のニーズの変化を受けて変わっていくかもしれませんが、長時間をかけて議論した新カリの理念と目的に照らし、先生方の手によってさらにより良いものになっていくものと思います。

グローバル教養副専攻への取り組みは４年間でもっとも難しいものでした。新しいコースの設置や説明会の充実など登録者増加にむけて試行錯誤してきましたが、残念ながら登録者数は思ったように増えませんでした。多数のコースと対象科目を用意してきたことが逆に煩雑なのか、海外体験がネックなのか、修了することの意義が伝わっていないのか、、、いくつもの原因を考えてきましたが、具体的な改善に結びつけられなかったことが悔やまれます。今後のグローバル教養副専攻の在り方は、RLS-Ⅱに向けた分科会の議論次第となりますが、学生にとって「副専攻」が魅力的で意義のある制度になることを期待しています。

ところで、毎年新任教員に対して全カリの意義や役割、制度についての部長からの説明が行われています。説明を受ける機会を見逃したのか、恥ずかしながら私は「全カリとは」を理解することなく過ごしてきてしまいました。この４年間で全カリの理念や歴史について学ぶなかで感じたことは、スタート時と26年目を終えようとする現段階との相違です。例えば「全カリは全学で支える」は、制度の根幹にかかわる理念のひとつですが、残念ながら学部・教員の全カリへの関わり方は希薄なものになっているように思います。また全カリを「旧一般教育課程の残存物」と捉える先生もいらっしゃるかもしれませんが、それと全カリとは理念が全く別物であることもあまり意識されていないように思います。理念の浸透が難しいのは教員の多くが入れ替わったからなのか、制度や組織の問題なのか。これを判断できるだけの根拠も改善のアイディアもいまのところ持ち合わせていません。しかし、教員の積極的な関わりがなければ、全カリは当初の理念を実現したり役割を十分に果たすことができないことは確かです。多くの先生方が、学生の持つ荒削りな知的欲求をカタチあるものへと導いた経験を共有したり、何が必要かを議論できる「フォーラム」に集っていただけることを願います。

2023年度　全学共通カリキュラム運営センターの主な活動

＜言語系科目構想・運営チーム＞

①英語教育研究室
- ４月５日（水）春学期FDセミナー
- ９月８日（金）秋学期FDセミナー
- １月23日（火）英語新自由科目FDセミナー
- 英語力伸長度測定テスト（TOEIC IP）実施
  １年次対象：春学期（プレイスメントテスト）４月１日(土)、秋学期　12月14日(木)～21日(木)
  ２～４年次対象：春学期　４月22日（土）～26日（水）、６月24日（土）～６月28日（水）、10月21日（土）～10月25日（水）、12月９日（土）～12月13日（水）

②ドイツ語教育研究室
- ７月15日（土）春学期担当者連絡会、第３回新カリFD
- ９月15日（金）第４回新カリFD
- ２月２日（金）秋学期担当者連絡会

③ フランス語教育研究室
- ７月７日（金）春学期担当者連絡会
- 12月16日（土）秋学期担当者連絡会

④スペイン語教育研究室
- ７月25日（火）春学期担当者連絡会
- １月23日（火）秋学期担当者連絡会

⑤中国語教育研究室
- ９月11日（月）春学期担当者連絡会
- ２月１日（木）秋学期担当者連絡会

⑥朝鮮語教育研究室
- ８月１日（火）春学期担当者連絡会
- ２月７日（水）秋学期担当者連絡会

⑦ロシア語教育研究室
- ８月６日（日）春学期担当者連絡会
- ２月28日（水）秋学期担当者連絡会

＜総合系科目構想・運営チーム＞

- ４月４日（火）スポーツ実習科目担当者連絡会
- ７月31日（月）2023年度第２回総合系科目担当者連絡会
- ２月27日（火）2024年度第１回総合系科目担当者連絡会

＜授業評価アンケート関連＞

- 2023年度「学生による授業評価アンケート」
  言語系科目実施科目数：春学期700科目、秋学期691科目、計1,391科目
  総合系科目実施科目数：春学期199科目、秋学期156科目、計355科目
- スポーツ実習「授業評価アンケート」実施

＜シンポジウム＞

◆テーマ：
外国語による総合系科目（F科目）の成果と課題

◆日　時：2023年12月６日（水）

◆場　所：
ハイブリッド方式（池袋7102教室およびZoom）

◆プログラム：

１．検証報告「データから見るF科目の現状」
後藤 雅知 氏（全カリ運営センター総合系科目構想・運営チームリーダー／文学部教授）

２．事例報告
- F科目（導入）「立教大学の歴史」
  田村 俊行 氏（立教学院史資料センター助教）
- F科目（中級）「Techniques for reading and enjoying a picture book in English」
  長谷川 アリソン 氏（外国語教育研究センター特任教授）
- F科目（上級）「Food Cultures and the Acceptance of Japanese Food in the World」
  今井 祥子 氏（全カリ運営センター兼任講師）

３．意見交換

＊本シンポジウム筆録は「大学教育研究フォーラム」第29号（2024年３月発行）に掲載しています。

全カリニュースレター　No.57
発　行　2024.3.29
発行人　浅妻 章如
編集人　飯島 寛之、松本 旬子
発行所　立教大学 全学共通カリキュラム運営センター